



日本糖尿病・妊娠学会

一般社団法人

日本糖尿病・妊娠学会 ニュースレター

The Japanese Society of Diabetes and Pregnancy News Letter

2016年12月発行 Vol.18 No.2

第35号

巻頭言



一般社団法人 日本糖尿病・妊娠学会 理事長

平松 祐司

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 産科・婦人科学教室 教授

このたび、引き続き一般社団法人 日本糖尿病・妊娠学会の理事長を務めさせていただくことになりました。1985年に「糖尿病と妊娠に関する研究会」として設立され、発展してきた本会の伝統を守りつつ、発展させていく所存であります。

2010年に発表された、世界統一の妊娠糖尿病診断基準に準拠した新診断基準をわが国でも採用したことにより、わが国では約10%の妊婦さんが何らかの糖代謝異常を合併する時代となりました。妊娠中の糖代謝異常の管理が、その後の母児に重大な影響を及ぼすため、本学会の果たす役割はますます重要になってきたと認識しております。

これまで本学会の役員、理事長として、1) 妊娠糖尿病の新診断基準(2010)の改訂、2) 妊娠糖尿病診断基準の統一(2015)、3) 本学会の一般社団法人化、4) 前方視的研究 DREAM Bee Study の立ち上げ、5) 2回にわたる GDM に対する SMBG の適応拡大、6) 妊婦の糖代謝異常 診療・管理マニュアル発刊などの事業に取り組んでまいりました。

現在、本学会の抱えている問題および今後の課題としては、以下のようなものが考えられます。

1) 一般社団法人としての学会運営を軌道にのせること

2015年10月に本学会は一般社団法人となり、2016年には法人としての最初の選挙を行い新役員を選出しました。しかし、細部においてはまだまだ整備すべきところがあるように思いますので問題点を改善していきたいと思っています。

2) 本学会主導の前方視的研究 DREAM Bee Study の推進

数年かけて準備してきた DREAM Bee Study がいよいよ開始されました。糖代謝異常妊婦の頻度、フォローアップ調査は、当初大森安恵先生が実施されておりましたが、その後、学会が引き継いでできました。DREAM Bee Study はその流れをさらに発展させ、本学会を中心に今後は前方視的研究として、妊娠中に発見された糖代謝異常妊婦、児を長期にわたりフォローアップしていきます。これにより、わが国における将来の糖尿病発症率が明らかとなり、それに介入することにより、わが国の糖尿病人口減少に寄与していけるものと考えています。

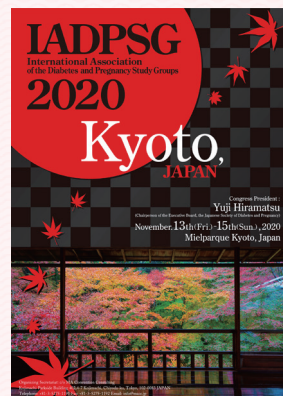
3) 国際会議 IADPSG2020 の準備

2016年のIADPSG役員会で、2020年にわが国でIADPSG2020を開催することが決定されました。期日は2020年11月13～15日、メルパルク京都で開催予定であり、第36回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会(杉山 隆会長)と併催する予定であります。学会を挙げて準備を進めていきますが、会員の皆様も本学会での発表をめざして研究を進めていただきたいと思います。

4) 本学会会員数の増加

胎児期の栄養状態が将来の肥満、糖尿病、メタボリック症候群、高血圧などに影響するというDOHaDの概念が注目されております。これに深く関係する本学会の役目として、妊娠中からの栄養管理、糖代謝異常管理が重要であることを国民に広く周知し、またこの分野に興味を持ち、活動してくれる会員を増やすように努力していきたいと考えます。

会員の皆様の協力をいただきながら、これらの事業を推進していきたいと考えておりますので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。



● 発行人 理事長 平松祐司

● 発行 一般社団法人 日本糖尿病・妊娠学会 www.dm-net.co.jp/jsdp/ TEL.03(5521)2881 FAX.03(5521)2883

編集制作: 南知人社 ロゴマークデザイン: 杉山光章

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル(株)創新社内

第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会の見どころ

テーマ：母児の健康と糖代謝異常

日時：平成29年12月2日(土)・3日(日) 会場：シーガイアコンベンションセンター(フェニックス・シーガイアリゾート内)



第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会長

鮫島 浩

宮崎大学医学部附属病院長
宮崎大学医学部発達泌尿生殖医学
講座産婦人科学分野 教授

第33回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会を2017年12月2、3日の両日に宮崎市のシーガイア、コンベンションセンターで開催させていただくことになりました。今回初めて宮崎でお世話させていただくことをたいへん光栄に存じます。本学術集会では、学会に流れている「母児の健康と糖代謝異常」の命題を踏襲したいとの意から、そのままテーマといたしました。前回の岡山(清水一紀会長)から2年越しに企画された、シンポジウム「多胎妊娠と糖代謝異常」をさらに発展させ、学会として何

らかの指針が出せるよう考えています。一方、次回の第34回(守屋達美会長)に引き継ぐ形でのシンポジウムを企画いたします。またスポンサードセミナーには、海外招聘講演として、海外でご活躍されている本分野のスペシャリストをお招きして、お話をお聞きたいと思っています。

また、第31回(内潟安子会長)から始まった助産師集中講座は好評であり、1回目の基本の「き」、2回目の基本の「ほ」に引き続き、関係各位のご協力をいただいて宮崎でも3回目の講座を開催し、母児の健康に求められる血糖管理の理解を深める機会を提供したいと考えます。

日本のひなた宮崎県の師走は、通常晴天に恵まれる季節です。学会の熱いディスカッションの後は、美味しい焼酎や宮崎牛、地鶏などをお楽しみいただければ幸いです。会員の皆様はもちろん、コメディカルの方々にもお声をかけていただき、多数のご参加を心からお待ち申し上げます。

第34回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会のご案内

日時：平成30年11月23日(金)・24日(土) 会場：パシフィコ横浜 アネックスホール



第34回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会長

守屋 達美

北里大学健康管理センター
センター長

第34回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会を、2018年11月23日(金)と24日(土)の2日間にわたり、横浜「みなとみらい」のパシフィコ横浜アネックスホールにて開催させていただくことになりました。大変光栄に存じ、現在鋭意準備中であります。

年次学術集会はこの数年間、子宮内胎児環境の重要性に始まり、妊娠前女性の教育から妊娠中そして分娩後の管理、さらには将来の児の予後のみならずその教育まで、

長期間にわたる連続性をもったケアに重点が置かれています。すなわち、医療者側としては「常に継続してみよう姿勢」をもつことが必要と考えています。

その点から、本年次集会では今までの流れも継承し、チーム医療の有機的な構築も含め、この分野の次世代への継承・啓発・教育に重点を置くプログラムを考えています。

糖尿病・妊娠学会の学術集会は関東では東京で開催されることがほとんどで、実は横浜での開催は初めてです。パシフィコ横浜は、「みなとみらい」の海沿いに位置し、横浜ベイブリッジや横浜港などの絶好の風景を楽しむことができます。11月23日(金)は祭日ではありますが、むしろそのために参加しやすいのではないかと拙考しています。本学会の会員の皆様だけではなくさまざまな分野の方々のご参加をお待ちしています。

トピックス

安日 一郎

国立病院機構長崎医療センター
産婦人科

周産期の話題から 妊娠糖尿病：アジアの関心

第19回アジア・オセアニア周産期学会（FAOPS2016）が12月1～4日、台湾の台北市で開催された。本学会は、アジア・オセアニア地域で周産期医療にかかわる産科医と新生児科医が参加して2年ごとに開催され、周産期医療に関連したさまざまなトピックスを取り上げている。妊娠と糖尿病という観点からは、アジア地域はいうまでもなく2型糖尿病の世界的な好発地域であり、周産期医療の分野においても妊娠糖尿病（GDM）関連演題には高い関心が示された。GDMをテーマにしたプレナリー・セッションも企画され、日本からは杉山 隆教授（愛媛大学産婦人科）が日本のGDMスクリーニングに関する話題を提供し、一般演題でも日本からのGDM関連演題に多くの質問が寄せられ、その関心の高さが感じられた。開催国台湾に目を向けると、GDMスクリーニング方法や診断基準は必ずしも統一されておらず、分娩後

のフォローアップに関しても、最近ようやくその関心が高まりつつあることが報告されていた。政治的な状況からか中国からの参加者は限られていたが、他の東アジア、東南アジア諸国でもその状況は同様である。2年後の次回FAOPS2018はマニラ、次々回2020年は東京開催（学会長 田中 守慶應義塾大学教授）に決定した。2型糖尿病の世界的な好発地域として、ethnic backgroundを共有する東アジア・東南アジア地域で、今後、妊娠と糖尿病に関する交流の機会として、FAOPSもその一助となればと期待したい。

ところで、学会期間中に「米国次期大統領が台湾総統と電話会談」という電撃ニュースが飛び込んできた。「トランプの衝撃はここにも」という、一見平和な台北の街への衝撃であった。台湾の話題でもう1つ。台湾は合計特殊出生率1.12（2015年）と世界最低だという台湾の演者の報告に、日本の参加者を中心に会場が驚きでざわついた。台北の観光スポットとして人気の夜市では、街に繰り出すびっくりするくらい大勢の健康的な若者を目にしたのであるが。

菊池 透

埼玉医科大学小児科

The International Society for Pediatric and Adolescent Diabetes (ISPAD) 2016が、スペインのバスク大学 Prof. Luis Castaño を大会長として、10月26日から4日間、スペイン、バレンシアで開催された。テーマは Education and New Technologies: Enhancing Care in Diabetes であった。6つの plenary session、11のシンポジウムなど、小児思春期糖尿病に関する今日的な課題を中心に発表された。すなわち、1型糖尿病の治療の進歩、肥満・2型糖尿病の pandemic である。前者に関しては、本年9月に米国FDAがHybrid Closed Loop SystemであるMedtronic 670Gを承認したことが報告された。このシステムでは、ポンプが基礎インスリンを自動調節し、患者はペーサルインスリンのみを調節する。さらに、Full Automated Closed Loop

Systemに関する臨床研究も発表されるなど、インスリンポンプ治療のさらなる進歩が期待された。膵島移植では、免疫担当細胞が通過できないカプセル内に膵島細胞を封入して移植する方法の進歩が伝えられた。日本からは20名程参加し、9つのポスター発表があった。今後、日本からの参加者、発表の増加を期待したい。

第9回アジア太平洋小児内分泌学会（APPES）が国立成育医療研究センター内分泌代謝科 堀川玲子先生を大会長として11月17日から4日間、東京で開催された。APPES会長はDOHaD研究で有名なニュージーランド、オークランド大学 Liggins 研究所の Paul Hofman 先生である。plenary lectureでは、DOHaD提唱者である Peter Gluckman 先生が“Fat fate and disease-from science to global policy”というタイトルで、出生後1000日からの科学的公衆衛生的肥満予防の必要性を講演された。APPASに参加した小児科医がDOHaDに関して興味をもち、当学会への参加者が増加することを期待したい。

柳澤 慶香

東京女子医科大学糖尿病センター

第59回日本糖尿病学会年次学術集会の報告

5月19～21日、京都において第59回日本糖尿病学会年次学術集会が開催されました。妊娠に関するセッションは、シンポジウム1つと一般演題はポスター5セッション、口演4セッションで合計54演題ありました。2010年の妊娠糖尿病の診断基準改訂による妊娠糖尿病患者の増加に伴い、糖尿病学会での妊娠に関する演題も急激に増え、今年は54演題中41演題が妊娠糖尿病に関するものでした。多くの方に妊娠に関心をもってもらえることはうれしいことであり、研究の発展が期待されます。

シンポジウムは平松先生と和栗先生を座長として、「糖代謝異常妊婦の管理」と題して、糖尿病合併妊娠から妊娠糖尿病まで、妊娠前教育から産後のフォローアップまで、と幅広く網羅する内

容でした。私自身は糖尿病合併妊娠における妊娠前管理の必要性について発表させていただき、愛媛大学、杉山先生からは妊娠糖尿病、特に肥満妊婦の管理の重要性、兵庫医科大学の楠先生からはCGMやSAPの有用性について、長崎医療センター、菅先生からは具体的な症例を挙げ、産科医と糖尿病医の連携におけるピットホールを、国立成育医療研究センターの荒田先生からは妊娠糖尿病の分娩後のフォローアップについて、ビッグアナイド薬を含めた糖尿病発症予防まで、報告がありました。妊娠前から肥満を含め患者教育が大切であることと同時に、SAPなどの新しい治療技術に関しては、看護師や助産師などの医療者の教育の必要性を感じました。また、最後に座長の先生からは、私たちすべての医療者が使用できる糖尿病女性に対する教育ツール、母子手帳とともに産科医と糖尿病医が情報を共有できるフォーマットの作成、普及の提言がなされました。糖代謝異常合併妊娠のよりよい医療を目指した、実り多きシンポジウムでした。